

架空の『リビング・ルーム』に立ち現れたのは、 目をそむけたくなるばかりの、私達の生のリアリティだった。

OM-2「作品No.4-リビング」
3月24日~28日 神楽坂ディプラッツ
die pretze M.S.A.collection2006 参加作品



OM-2 撮影/田中英世(2点とも)

柱のそばで女がひとり揃らめく。皿に蝋燭を灯し、と思うと突然手を放し、ガチャ。皿の落ちた鈍い音の衝撃が緊張感を与える、舞台が始った。旅芸人のようなカバンを持った男女が、エロティックな行為半ばで崩れ

落し、「No.3」ではゴミ箱の中のカメラで自分を写しつつ、語り身もだえた佐々木敦。そのコンプレックスがリアルに迫ってくる。これは観客だれしもが持つ、それぞれのコンプレックスを刺激してやまない。いじめ、虐げた者と虐げられた者の思いは、こういう場に溶けしていくのかもしれない。架空かもしれない物語だが、その自己暴露的、私小説的心情吐露が強いリアリティをもたらす。

これに対し、舞台上手でシルクハットに黒のフォーマルな男二人が、体を斜めに傾げて立つ姿は、マグリットかデルヴォーの人物にも見え、正のバランスを崩す象徴のように機能している。さらに青年たちが身もだえ、一人は全裸になって振舞していく。ノーマルな感じで、崩れていくことがうまくはないが、それがいい。彼や黒服たちは劇団自動焦点の役者らしい。タイトで抽象的、マイムのような雰囲気も持つ劇団が絡んだことで、OM-2の「異物感」が見事に浮かび上がった。

今回の舞台は、自動焦点の脚本・演出家佐々木治巳のテキストと、佐々木敦の書いたテキストに、OM-2の真壁茂夫が手を入れながらつくりあげたという。壁や床に書かれるアフォリスムといえる抽象的な言葉、寓話のような動物話と私的ないじめ話がつながっていく。二人の佐々木の抽象とリアル、最も両極のテキストが混在し、そのコントラストが美しい。これまでのOM-2の作品に比べるとわかりやすくシンプルだ。テキストを示すと通常「読み」は限定されるが、この舞台では、混在するテキストが読みの範囲を広げた。作品タイトルも抽象的だが、抽象とリアルのせめぎ合いが惹きつける。

同じフェスティバル、「MSAコレクション」では岸井大輔、木室陽一らによる「(-) 2LDK」が上演された(麻布ディプラッツ、4月5日)。これは観客席も舞台も通路にして、2LDK的な部屋で展開される日常が、あちこちで同時に繰り広げられ、観客が見て回るという趣向だった。またドイツのヤン・ブッシュの「マッチ」は(世

田谷パブリックシアター、4月8日)、男女の愛の争いをダンスで描く作品だが、これも2LDKほどの空間で映像を多用して展開するものだった。この2つはあくまで人間の日常を舞台空間に置くことで、非日常化しようとしていたが、OM-2の「リビング」は、日常のなかにある非日常を露呈させる。いじめが日常となった男、痴漢する男たち、電車に轢かれるイメージなどが、次々とリビングルームに立ち現れる。

リビングという言葉は、普通はリビングルームの略語として使われるが、この舞台ではliving、「生きている」という意味が重ねられているのだろう。いじめられるとの告白で生き続ける佐々木は、僕らのなかのいじめの構造を露呈するが、同様に、全裸になり痴漢する男は、演じ舞台に立つこと自体を露わにし、文字を書き続けて壊していく男は、脚本を書く人間の歪みを呈示しているのかもしれない。まさにリビング、生きていることのリアリティといえるだろう。それを支えているのが、佐々木敦の存在だ。演じられる日常ではなく、架空の話としても、強烈かつリアルに迫ってくる。OM-2の芝居では、当たりさわりのいい日常ではなく、日常のなかに潜む混沌、生きることの困難とリアリティが激しく観客にぶつかる。それが苦痛である人もいるだろう。しかし、このリアリティを回避することは、僕たちの本当の日常、そして生きること(リビング)自体に目をつぶすことのよう気がする。(志賀信夫/舞踊批評)



● OM-2…真壁茂夫を中心に87年に結成。以来、パフォーマーの身体表現や、テキスト、映像等を複合させた前衛的で実験的な作品を次々と発表。現代社会、あるいはそこに生きる人間像を過激な表現で映しとり、日本の演劇シーンに驚きと衝撃を与え続けて来た。ボルドー、NY、ワルシャワ等、国際フェスティバルに数多く招聘される。11月にはインドネシア、韓国公演、来年2月『ハムレットマシーン』東京公演を予定している。

客席と舞台、バグダットと渋谷。二つの世界の距離を無化する、独創的な「語り」の手法に拍手。

チエルフィッチュ 「三月の3日間」
3月11日~21日 六本木 Super Deluxe

六本木のクラブ、スーパーデラックスに、舞台を三方から取り囲むようにゆったりした空間が作ってあった。

台詞のノリにあわせて体を微妙にくねらせる、あるいは、ハケツで水を組むような、変な動きを続けながら俳優が観客のとても近い位置で語り続ける、そういうチエルフィッチュースタイルの作品。どこか奇妙でユーモラスである。

語られるのは2003年アメリカがイラク攻撃を開始した日から3、4日の、反戦デモも通りすぎる渋谷公園通り、丸山町界隈のちょっとした出来事である。それは客のほとんどいないミニシアターで出会いアラブホテルで4日間を過ごしてしまった男女のこと、はじめてデモについて歩いた男二人とか、ようするに渋谷でブラブラと時を過ごしていた、6名の男女の体験などである。とても魅力的なのは、彼らの息づかいがあまりにも

自然で、渋谷をブラブラする若者のそれになっていることだろう。会場にはその自然な雰囲気を楽しむ演者と観客が一体になった静かで温かい空気が生まれていた。

私は演劇の可能性は二つの方向に開かれていると常々考えている。一つは客席つまり観客との関係、もう一つは語るということだ。チエルフィッチュの俳優たちは、観客との理想的とも言える近さにおいて、街角の出来事を客観的に批評的に語るという方法を堂々と編み出して来たのだ。なんと勇敢な連中のだろう。しかし、このスーパーデラックスという会場のせいかも

しれないが、この作品で想定されている観客は、あまりにも(おそらく他の作品よりもずっと)出演者に近い同世代の人間たちではないだろうか。もしそうだとすれば、もっと広く漠とした観客の地平に向かって新たな歩み方を探る日が来るのだろうか。

マルチエロ・マストロヤンニとソフィア・ローレンが、ムツ



チエルフィッチュ 撮影/横田 徹

リーニの人場するローマのアパートの一室で表の喧騒とは無関係のことなく、逢い引きを展開する「特別な一日」という映画を思い出した。「三月の5日間」という作品でも人物達ははるかなイラク攻撃とは無縁のように過ごしているが、そこには世界が戦争の時代へと進んでいく遠い足音のようなものがすかに響いている。

問題はその距離、バグダットと渋谷の距離七千キロなのだろうか。そうではなく、ローレンとマストロヤンニのいる部屋の壁一枚向こうにはファシズムの怒号が吹き荒れているように、じつは距離は問題ではないのである。あの三月、渋谷とバグダットも壁一枚隣であった筈だ、と舞台は主張していた。そして2006年の現在、アメリカ軍の極東戦略再編のために日本が支払うのが千三兆円に達するとも言われはじめたこの日々にあって、それはなおさらのことである。(井上二郎)

●チエルフィッチュ…作・演出の岡田利規を中心に関成された演劇ユニット。「超リアル日本語」と称されるんだらとした捉えどころのない台詞まわしと、発話の際の身振りを誇張したかのような独特の身体所作を用いた作風で、演劇のみならずダンスの世界からも高く評価されている。『三月の5日間』は第49回岸田戯曲賞を受賞。12月には新国立劇場で新作が上演される。

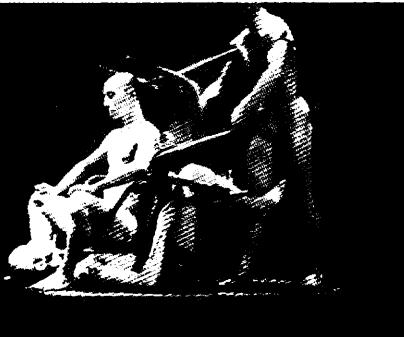


舞蹈の「枠」から抜け出せ！まだ見ぬ世界へ、 舞踏家たちの挑戦が始まった。

NUDE 「部屋」
4月11日～12日 神楽坂ディプラツツ
die pratz M.S.A.collection 2006 参加作品

NUDE「部屋」観覧後、口をついで出てきたのは「淡々と日々は流れ、淡々と何することもなく部屋にいる。やることはいくらでもある。観るものもいくらでもあるが、そのどれにもりかかることを見出せず部屋にいる」という言葉だった。NUDEのメンバーの一人である金野泰史と私とは、舞踏家・元藤燁子^{*}のワークショップ生で同期であり、岡本太郎美術館での舞踏パフォーマンスで共演した私たちは、激しく師や天や地に長い竹を突き立てた。その数ヵ月後のあるイベントで、目黒大路氏とNUDEを旗揚げしたことを伝えられた。彼の眼は遠くを見据え、決意を新たに舞踏の深奥へと踏み出していく姿を見、興奮しながら頷いたことを覚えている。そして、私も元藤の何某かのものを越えていこうと、生前の言葉を拡大し、多ジャンルとのコラボレーション、ソロ活動を中心に原爆ドーム、第五福竜丸、NYへと自身を社会の中に投げ込むように活動していく^{**}。その頃、NUDEは舞踏の深奥へ、1回、2回と公演を重ねていた。

第3回公演は「部屋」という題名であった。演出



の目黒が「今一度舞踏の特性について考え、舞踏的空间・時間・肉体を構築し、更なる可能性を探り、そして発展させることを目指している。」と言う通り、前回までは手探りな部分が多くかったような気がした。だが、

今回の「部屋」は、今までの様式と異なっていた。目黒特有のウイットに富んだ演出が随所に存していたが、力を込めるところや、興奮を誘うところを極力排除していた。人々、そういった傾向はあったのだが、今までより濃く打ち出していたのが光った。

さて当の私に返ると、「部屋」という題名・作品が妙な引っかかりを誘発し、私の背をむずむずさせた。居ても立てもいられず辞書調べると、面白い発見があった。

「部屋—I. 家の中をいくつかに仕切ったそれぞの空間。座敷。室。間（ま）。（小学館・大辞泉より）」

これを「人間をいくつかに仕切ったそれぞの類。ヒト。哺乳類。人間。生物。」と言い換えてみると、さっきまでの背のむずむずがおさまり、小刻みに表皮が震えるのを感じた。

私も外側へと出て行ったつもりが、未だに舞踏の部屋に閉じこもっている、またはヒトという類に閉じこもっているのではないか…と暗示させられたのだ。元藤は晩年「世界中が私の劇場だ」と言っていた。その言葉通り、舞踏は閉じられた劇場の中だけに存在するのではない。では、その先に広がっている「世界」とは…。NUDEをはじめ、元藤の門下生たちはその可能性を探ろうと、いま試行錯誤を重ねている。

最近になって、荒川修作氏が有機体一人間に建築的身体の部屋（三鷹天命反転住宅^{***}）を完成させたという知らせを聞いた。科学、芸術、哲学といった枠組みを越えて身体を捉え直し、生そのものを変革しようとする荒川氏の思想と試み…ここには舞踏が世界とつながるための一つの大きな可能性があるようと思え、私は武者震いを覚えた。そして今、私はそこから何かをつくろうとしている。

「舞踏はダンスの枠を越えて、どこかに降り立とうとし、未だにそれが降り場を見出せないで部屋にいる。やられたことはいくらでもある。観られたカラダはいくらでもあるが、そのどれにもりかかることを見出せず部屋にいる。」

そう、もしかしたらNUDEの「部屋」の観覧後に残された背がむずむずするような感覚の根底には「舞

踏一部屋」という、「舞踏を通して世界へ、世界を通して舞踏へ」と呼びかけるメッセージが含まれているのではなかろうか。未だに言葉では越えられない厚い壁に閉まれている。NUDEには舞踏の「部屋」を拡大していく可能性を感じている。なぜならば、舞踏という定義と真に向から対決しようとしているからである。「舞踏といふものがある」と思っていい、むしろ「舞踏」を否定しようとしているからである。否定がないものに、発展はないことはもう分かりきったことではないのだろうか。舞踏を発展せしめようとしているNUDEは他の舞踏家とは一線を画している存在だと言える。実力や実績は全く興味がない。絶えず変化（へんげ）を繰り返し、新鮮な偶発性の変化（へんげ）に自身が驚嘆する。

さて、窮屈な部屋の中での独り言をやめて、もうそろそろ本当の外へと出ても良い時期かもしれない。窓越しから見える景色を背に、ドアノブを掴んで外へ、いや、ドアはもう腐っている！ くだらないね、そして大好きだ！

（飯田晃一／芸術身体研究所）

* 1…元藤燁子（1928～2003）／舞踏家。1950年に「アスペスト館」を設立。夫である元藤燁とともに「舞踏」の基礎を築き上げ、生涯その可能性を追究し続けた。自ら踊り手として作品を発表するにとどまらず、ワークショップを通して個性的な人材を世に送り出すなど、後の世代にも大きな影響を与えた。

* 2…芸術身体研究所の活動については <http://ab-labo.com/> 参照。

* 3…荒川氏の諸プロジェクトについては以下参照。
<http://www.architectural-body.com/>

● NUDE…04年、目黒大路を中心に結成された舞踏カンパニー。今一度舞踏の特性について考え、舞踏の空間・時間・肉体を構築し、更なる可能性を探り、そして発展させることを目指している。次回公演は未定。

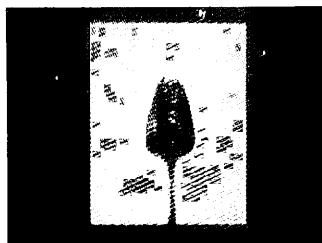
が作品に漂っているのがとても不思議だ。詩という形で実験的に取り組んだ、というよりもごくごく自然とその表現にたどり着いた…という風なのだ。作家の芳賀は現在は福島県に住み、東京に出て来て個展等を行うのは非常にまれだという。あまり話すことは出来なかったが、自分で漉いた紙で出来た名刺を貰った。作品自体も不思議であったが、作家自身の性格や暮らし、あるいは作家と作品の関係性にも興味を惹かれた展示だった。（小笠原幸介）



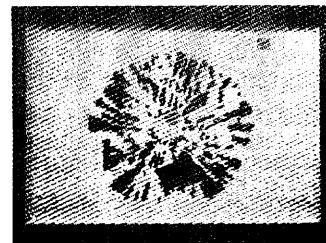
INTOWN

作家と作品

● 4月某日、六本木の金鳳堂画廊へ。ここは六本木の父差点すぐ、1階は眼鏡店という不思議なつくり。ガラス張りの画廊は、明るい陽射しが差し込む。その光に向かって、吉光たけひろの描いた、花は開いていた。切り絵？と顔を近づけると、二層になった画面は、花びらは細やかに一枚一枚切り抜かれた上の層と、その切り抜かれた下の層は赤く色づけされている。立体的に見える花だけでなく、和紙のような紙に描かれた花、紙を違えて描かれた同じ花、咲いている花が生き生きして見える。奥の部屋にはまだぼみの花が並ぶ。古賀隆義の水彩画だ。吉光の赤い花に対して、古賀は青い花。額の表丁もきちんとしているせいか、静かに花開くのを待っているようだ。大きな額にハガキサイズくらいのつぼみ、そのバランスは花畠ではなく咲く初々しささえ思い出させる。春の暖かな季節を平面作品で感じることが出来た。（藤田千穂）



左) 古賀隆義作品



右) 吉光たけひろ作品

芳賀 徹展 左) 作品 右) 会場風景

飾り気のない芝居の中に光るわざ。 鳳劇団は会話劇の「良心」か?

鳳
劇
團

鳳劇団「忘れな草をあなたに」
5月18日~19日
◎新宿タインイアリス

会場に入るとなんとも能天気な昭和歌謡が流れている。その雰囲気と以前の作品『昭和元禄桃尻姉妹』の評判から、ドタバタ喜劇のようなものを勝手にイメージしてしまっていたのだったが、実際観てみると全然違う印象だ。もちろんドタバタも笑いの要素も芝居の中にはある。しかし意識してコテコテの笑いを狙っている訳でも、客に媚びているような態度も一切なく、俳優達の立ち振る舞いも含めて、なんといふかとても品のある舞台なのだ。

芝居はごくストレートな3人芝居だ。原稿用紙に向かい小説を書こうとしている初老の男。その物語はある突然の雨の日、男が自分の傘を貸してあげた若く美しい女の話。それが自分が実際体験した記憶なのか、空想の世界の物語なのか分からぬまま男は「幻の女」の影を追いかけて妻との生活を送る。妻には夫が痴ほうでボケてしまったとしか思えない。幻の美女を演じていた女優は一転ハイテンションな看護婦に変身、治療と称して男と嘴み合ないトークを繰り広げる…。飾りつけのない芝居。私自身はあまりこのような芝居らしいお芝居、というのを普段あまり観ないのだが、このある意味地味ともいえる会話劇の「普通さ」に逆に惹きつけられてしまった。でも、そ

の普通さの中にさりげなく演出は利いている。特に病院でのドタバタ治療を終え、夫婦二人での会話シーン。妻が昔行った旅行の思い出を懐かしそうに語り出す。しかし、最後に男がそれまでのなごやかな雰囲気を一変させる一言を妻に語る。「一どちら様でしたか?」。この一言で芝居は終わるのだが、この一言の切れ味はすごいと思った。楽しい芝居だと思っていたら突然、これは怖い話になった。何か大仕掛けの装置があるわけでもない、ドラマチックな展開があるわけではないのだが、このたった一言の台詞がこれだけ力を發揮するとは、非常に驚きだった。恐らくこれは会話劇というものが持っている、大きな魅力のひとつなのだろう。会話劇にあまり馴染みの無い私にもそれは伝わって来た。

また、全体を通じて感覚全体に訴えかける工夫がしてあったのも演出の一つの特色かもしれない。例えば男がふかすパイプ煙草の匂いが会場を包み込む。男が一人でパイプをふかしながら原稿を書くシーンはかなり意図的に長くしてあったのではないかと思う。匂いで言うなら、「夏」を感じさせる蚊取り線香の匂いもずいぶん使われていたようだ。匂いだけでなく味覚でいうと、男がそうめんを食べるシーンも印象的だ。妻と会話しながら何度もそうめんをするのだが、その音と相まってなんだか非常にそうめんが食べたくなってくる…。看護婦のスカートが短かすぎてパンツが丸見えなのも、そんな演出のひとつなのかもしれない

アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場
TINY ALICE より最新ニュース

い(?)。

一見何の変哲も無い舞台だからこそ会話劇の本質が出ているような気がする。無論、何度も申し上げるように私は会話劇の本質など語ることは出来ないのだが…。そんな気にさせる舞台だった。

(小笠原幸介/本紙)

●鳳劇団…1980年に作・演出の鳳いく太を中心に結成された「游劇社」の新たな展開として2004年から活動を始める。2人または3人などの少人数の芝居で映画やテレビとは異なる「舞台」の面白さを追究すべく活動中。「忘れな草…」は「昭和元禄桃尻姉妹」と共にレパートリー作品として今後上演を重ねて行く予定もある。

●劇団ホームページ…

<http://www.geocities.jp/ohtorigekidan>

→ 女優のしるさ娘。
今日は和服姿の「幻の美女」と
超ミニのハイテンションな
看護婦を二役で熱演。



ダイナミックなダンスと劇中劇。 女性中心のユニークな劇団が描く「男と女」。

Miss PRs「デリカシー」
6/2(金) & 6/3(土) 19:30 6/4(日) 14:00
前売¥2800 当日¥3200 問=03-3975-4611(劇団事務所)
作・演出=齊藤尚子 監修=小暮和浩 振付=chaco 出演=篠田亜矢子 沢田珠美 成田真貴
星野良太 齊藤尚子 奥山健二 他

★妖怪ちつとは人間のリュウに恋をした。「僕は君が嫌いだ。君にはデリカシーがないから」そしてちつとはデリカシーを探す旅に出る…そこで待ちうけっていたものとは?

Q—Miss PRsは、女性中心で構成された演劇集団ということですが、そのあたりは劇団としてのコンセプトも含めて、意図的なものなのでしょうか。

A—はい。女性ならではの視点で、女性だからこそ描けるというものに挑戦しています。

Q—それはちょっと怖いですね。

A—男性の観客からよく怖いと言われるのですが、怖い物語を書いているつもりはないんです…。(笑)

Q—女性的というと、(一般概念としては)環境やシチュエーション中心というよりも、登場人物の内面にポイントが置かれていると思うのですが、いかがでしょう。

A—柔らかい視線で観てもらえたならと思います。現代社会において、20代後半から30代の女性って、

とてもフクサツな心境を抱えていると思うんですね、私を含めて。世間では結構大人だと思われがちですが、分からぬ事が沢山ある。例えば、社会性と母性のバランスとか、何が良くて、何がダメで、それは誰が決めるのかといった価値観の問題。謎を解く鍵は、自分の内面だけではなく、他人の内面に興味を持つ事ではないでしょうか。例え正解にたどり着かなくても、そういう行為を象徴的に舞台化しています。

Q—象徴という意味では、ダンスというものが大きなウェイトを持って挿入されていますが、ダイナミックな群舞はMiss PRsの特徴の一つにもなっていますね。A—「ここを強く伝えたい!」と思う部分を言葉で説明するのではなく、敢えて肉体だけで伝えたい。動きだけで表現することによって、そのシーンでのテーマや出来事を抽象的に簡略化出来るし、観客にもより多く自由に想像してもらえるんじゃないかと思うんです。

Q—過去の作品では、現実の人間たちが内面から浸食されて本質があらわになるものが多かったようですが、今回はどうなんですか?

A—テーマは、やはり「愛」「男と女」。現実的な関係を、劇中ではディフォルメされた姿で描きます。メルヘンの皮をかぶった劇中劇です。二つの世界がクロッシングして行くのかインポーズして行くのかは

新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場
DIE PRATZE より最新ニュース

観てもらえば分かると思いますが、観る側の立場や視点で、色々な結論に行き着くんじゃないかな。でも、きっとこの非現実的な感覚は共感してもらえると思います。

Q—切り口は一つではないと。

A—ええ。内的世界と外的 세계の境界は、実はすごく曖昧なんじゃないでしょうか。それに、人が他人に見せている部分なんてほんのわずか。何が正しくて実際なのかは、視点や立場が変わっただけで逆転したりするんじゃないでしょうか。

Q—そのあたりは、観客が判断できると。

A—はい。投げっぱなしではないので、模範解答はいくつかあるはずですが、どれが正解かは、見た人によって、それこそ男性と女性で変わってくると思います。できれば、多くの男性にも見ていただきたいですね。第一回公演のキャッチは「緩やかなる男子禁制」でしたが…。(笑)劇場でお待ちしています。

JOIN IN THE PICNIC

期待の公演情報

◆神楽坂die pratze
5/26(金)~5/28(日)オッセルズ
「編み上げブーツでハッシュドビーフ!」

問=090-9724-8326

E-mail occulus@hotmail.co.jp

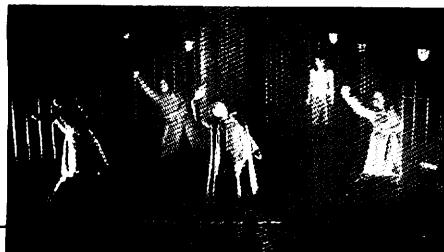
◎オムニバスコント公演! ファッキンな
日常に不満なアナタへとおきの
笑いを! パカさ100%のコント、映像、
音楽で最高の週末をお届け致します。

◆麻布die pratze
5/26(金)~5/29(月)
Ump Temp

「**青色の詩想劇**」アンチキヨヒメ
—求めむと思し願ひて—

問=090-9321-4162(Ump Temp制作部)

◎時の交錯する魔境のような洋館で、雨の
中、女は鐘突堂の屋根の下で佇む男を見
た…。安珍清姫伝をベースに紡ぎ出す、
生演奏と映像が織り成す青色の詩想劇第二弾!



『指定管理者制度』で地域の文化施設はどう変わる? ~横浜市「大倉山記念館」の場合

大倉山記念館は横浜市港北区にある歴史的な建物で、一年を通じてコンサートや展覧会等、様々なイベントが行われ、市民にも利用しやすい文化施設として愛されている場所だ。

平成15年に地方自治法の一部が改正になり、地方の公共施設を民間の団体が管理することが可能となった。いわゆる「指定管理者制度」による管理運営である。この法律改正によって大倉山記念館は今年4月から特定非営利活動法人アートネットワーク・ジャパンが管理運営を行うことになった。

豊島区の廃校を本格的な劇場／稽古場として蘇らせた「にしきがも創造舎」の運営や国際的な舞台芸術フェスティバル「東京国際芸術祭」等の企画制作を成功させてきたアートネットワーク・ジャパンが、今度は大倉山記念館をどのように展開させていくのだろうか。ANJ理事長の市村作知雄氏に以下のコメントを頂いた。

この4月から横浜市大倉山記念館の指定管理者として、いわゆる公の施設の管理運営をはじめた。なんだか不思議な感じだけれど、突然に我々は公共施設の管理者になってしまったのである。なんでこんなことになってしまったかというと、今までなく地方自治法の244条第2項が改正されて、普通の民間組織でも公共

施設の管理運営ができるようになってしまったからだが、それが果たして幸せな結果を生むかどうかは定かではない。

雇用のことを考えても、今回の指定管理者は5年の任期なので、スタッフをパートナメントに雇用することができない。5年後にはまたコンペがあって、我々が次も勝つ保証はどこにもないので、雇用形態をどうするかは大変むずかしいと言わざるをえない。それに私はどちらかといえば、他人の職場を奪うようなこともできるならばしたくないので、指定管理者制度にも手をあげて賛成というふうにはいかない。ではなぜ指定管理者に手をあげたのかというと、我々が取らなければ、ビルのメンテナンス会社かスタッフの派遣業者が取ってしまうからで、それならば我々自身がなったほうがまだましだろう。

さて、横浜市大倉山記念館は昭和7年頃、古代ギリシャの建築様式を取り入れて建築された非常に魅力的な建物である。東急東横線大倉山駅を降りて、急な坂道を7、8分登りきった山の上にあって、80人はいるミニコンサートホール、壁に通常の大きさの作品60点ほどが飾れる回廊式ギャラリー、それと10個の会議室兼練習室が存在する。もっとも魅力的な施設は回廊式ギャラリーで、中央に広い中庭や2つの箱庭が併設されて

いて、いろんな使い道が考えられる。この施設の特徴は何といっても非常に安いことだ。ギャラリーを1週間借りて28000円、ホールは1日でなんと5000円にしかならない。例えばホールを午前9時から12時まで3時間かりて700円、定員50人の会議室を1日借りてわずか3000円である。値上げしたくとも、条例にしばられているからそう簡単にはできない。それに借り手の地域の人々のブーリングが恐くて、値上げする根性もいまのところない。

確かに指定管理者となって、公共施設の運営をしてみると改善できる要素も少なくないし、楽しい企画も思いつくので、このような仕事もそれなりにはやりがいもあるけれど、通常の貸し館業務だけやっては、ほとんど廢人になってしまいます。だから、早々に横浜のSTスポットとの連携を立ち上げるつもりだし、秋からはカフェとミュージアムショップをオープンさせる計画なので、ひやかしでも、おいしいコーヒーでも飲みに来ていただきたい。大倉山記念館カフェでアートや東京国際芸術祭の将来でもお話ししましょう。それに夏には大倉山記念館の塔に登れば、横浜の花火も一望できるに違いない。

(市村作知雄／アートネットワーク・ジャパン理事長)

●大倉山記念館ホームページ

http://www.yaf.or.jp/fac_sngl/okurayama/gaiyou.html

TINY ALICE / NPO ARC

新宿区新宿2-13-6 光恵ビルB1 tel&fax 03-3354-7307
<http://www.tinyalice.net> tokyo@tinyalice.ne.jp

5/18(木)～5/21(日) ■なすびプロデュース「なす我儘」
「それを言っちゃあお終いよ!～禱転じて福となす?～」問=03-5771-2077 ☆作・演出=浜津智明 ☆出演=なすび しんご 加藤学 照喜名円 中川香果 中野妙子 葉山力樹 安藤めぐみ 藤川三郎(文学座)
◎これがアシタの活きる路!人生を賭しまして繰り広げております…我が人生劇場・なすびプロデュース「なす我儘」。回を数えます事、第六弾と相成ります今回!! 約二年振りとなりますが、相も変わらずお茶目なドタバタ喜劇を…これでもか? とにかくにお届け致したく存じます。

5/25(木)～5/28(日) ■HUSTLE MANIA 「SUNRISE」問=090-4099-5626
☆作=沢谷・F・真和 ☆演出=渕沢幸子 勅 ☆出演=吉川湖 中谷健吾 鈴木愛 大間剛志 金森勝 竜沢孝和 富留龍人 板倉美智子 潟戸口のり子 加古みなみ 加藤和彦 関口敦 植原弘次 上吉間人 古屋治男(椎名町オフィス)

◎舞台は20×20年の1コのある大陸のある部隊のお話。戦場の中で生きる若者(?)達の心情の変化を表現する舞台にしたいです。テーマは平和。

5/29(月)～5/30(火) ■集団田中 明細未定

6/2(金)～6/4(日) ■SPIN-OFF TEATER

「ボボス-Phobos-」問=090-7714-8573

☆作=齊藤了 ☆演出=シバタテツヨキ

☆演出=内村智恒 天野真司 K猪奈 宮澤千絵 齊藤了 佐藤和徳 シバタテツヨキ

◎人類が地球を捨て、宇宙に生きるようにになった時代。宇宙を飛び回る運び星ハザマは、ひょんな事から、ある宇宙船にたどり着く。何年も前に行方不明となつたその船には奇妙な人々が生きていた。科学者、コンピューター、人間外生命体などが入り乱れたり入り乱れなかつたりする、少しSFな物語。

6/8(木)～6/11(日) ■ラマカンパニー Hotcake Panic Play 「掌みたひな太陽に押されて!!」問=03-3970-8160

☆作・演出=成樹章 ☆出演=成樹章 鈴木亀鳥 遠沢誠 大阿久麻美 羽田野洋人 桂裕美 渡辺麻理子 吉奈源津子

◎俺の打った打球は太陽に向かってストレートに飛んだ! 僕は奇跡を描んでいると思った…。お盆を前にしたある夏の日、松田ツトムは実家へ帰省する。そこに母と妹と父が待っていた。??????親父!! お前はすっと前に死んだだろ?

麻布 die pratze

〒106-0044 港区東麻布1-26-6-2F T&F 03-5545-1385

5/19(金)～5/21(日) ■劇団時空同盟

「ワヌ アゲイン～ある写真館の仰天な昼下がり～」問=080-1159-0514 (劇団時空同盟制作)

☆作・演出=岩内敦子 ☆出演=宇住昌敏 多地映一 蘭部正樹 高井康寿 ハル美和 岩田宏 谷野誠一 他

◎店じまいを決めた写真館。夫婦をやめようとしている二人。壊れていく時の中で一ひき返せなくても、思い出してみませんか、あの無い想いをもう一度…。

5/26(金)～5/29(月) ■Ump Temp

「<薔薇の詩想劇> アンチキヨヒメ 一求めむと思し願ひて…」

問=090-9321-4162 (Ump Temp制作部)

☆作=加瀬京子 ☆演出=長谷透 ☆出演=及川純 蜂谷眞未 吉野翼 谷修 川島めぐみ 下村康太 萩木幸寿

6/2(金)～6/4(日) ■Miss PRs

『デリカシー』問=03-3975-4611 (劇団事務所)

☆作・演出=齊藤尚子 ☆監修=小暮和浩 ☆振付=chaco ☆出

演=藤田亞矢子 沢田珠美 成田真貴 野星良太 齊藤尚子 奥山健二 他 ◎怪盗ちっとは人間のリュウに恋をした。僕は君が嫌いだ。君にはデリカシーがないから! そしてちっとはデリカシーを探す旅に出る…そこで待ちうけていたものとは?

神楽坂 die pratze

〒162-0812 新宿区西五軒町2-12 T&F 03-3235-7990

5/2(火) & 5/3(水) ■東京理科大学Ⅱ部演劇部 泣断

「カロル」問=090-4912-3246

☆演出=藤野梢葉 ☆出演=高橋美帆 鈴木利通 田辺孝宏 岩崎裕紀 藤野梢葉

◎いつも真っ直ぐに曲がって歩いています。終点が見えないので道が正しいのかわかりません。しかし真っ直ぐに進んでいる事実を胸に私たち歩いています。

5/5(金)～5/7(日) ■人の森ケチャップ

『夜空にガオー』問=080-3150-4120

☆作・演出=田中智子 ☆出演=小西奈津子 小林恵実 藤井マユ美 濱裕子 他 ◎ひとつの夢をかけて、私たちは初出荷します。見終わつたあと、人知れず夜空に向かってガオーと叫ぶあなたの出発の記念に。ご賞味下さい。

5/11(木)～5/14(日) ■演劇企画「発破」+ SHIMIN劇場II

『草の剣』問=048-466-4831 (提組事務所)

☆作・演出=提吉行 ☆出演=洞英治 中田潤 中垣美奈 他

◎人間は何処から来て何処へ行くのか? 改革の熱き思いに燃えて、幕末の志士たちが時空を越え現代によりがえり活躍する。

5/16(火)～5/21(日) (※「散歩キヤツ」) & [雑種キヤツ] W

キャスト制、詳細劇団まで) ■散歩道楽

『散歩道楽2006再演の祭典 サンボジウム「にや次郎の恋」』

問=03-324-3361 (散歩道楽)

E-mail ticket@sanpodouraku.com

☆作=太田善也 ☆演出=【散歩キヤツ】橋場ふみえ 【雑種キヤツ】太田善也 ☆出演=いいせいこ 藤本樹子 川原安妃子

谷中田善規 川原万希 朝原千惠 他

◎劇団真中の『散歩キヤツ』、客演のみの『雑種キヤツ』。ある疑惑を残したまま死んだ男と通夜の晩にいなくなった1匹の猫。あなたを嗅ぐ物語。

5/26(金)～5/28(日) ■オッセルズ

『綱み上げヅツでハッシュドビーフ!』問=090-9724-8326

E-mail ocellus@hotmail.co.jp

☆作・演出=河野真子 ☆出演=ヤナカケイシケ なかしまみゆき

矢田一路 古市海見子 武子太郎 他

■料金:前売=¥2,500 当日=¥3,000 (学生は¥500引、要学生証) ダンスがみたい! お得なチケット! インターナショナル、

批評家推薦、両シリーズで使えます。1演目につき1回有効、30枚現定、die pratzeのみで発売)

5回券=¥9,000 (学生=¥7,000) 通し券=¥16,000 (学生=¥13,000)

■チケット予約=チケットぴあ 0570-02-9999

神楽坂 die pratze 03-3235-7990 (火曜を除く12:30～17:30) kagurara2000 @yb.ne.jp

麻布 die pratze 03-5545-1385 (月曜を除く18:00～23:00) azabubu26@yb.ne.jp

●インターナショナルシリーズプログラム ~海外のダンサーと日本人による<共同制作><観劇>シリーズ~ ●

<神楽坂 die pratze>

7/3～5…マイケル・ペストル×工藤丈輝(USA/日本)

7/13～14…ダニエラ・正朔(オーストリア/日本)

8/1～2…マリー・ガブリエル・ロッテ/インテクタクヤ(イギリス/日本)

8/8～9…山本嗣/ルーカス・レンドン+ゾハ・コーベン×鶴山欣也(日本スベイノイスラエル)

<麻布 die pratze>

8/18～20…ジャッキー・ジョブ/遠藤寿彦(南アフリカ/日本) (※8/20 シンボジウム「コンテンポラリーダンスの現在と、これから」有り)

●批評家推薦シリーズプログラム ~ダンスの批評家たちが推薦するダンサーのシリーズ~ ●

<神楽坂 die pratze>

7/15～17…森繁哉 福士正(舞踊批評)

7/24～25…岸由季 ※die pratze dance festival ダンスがみたい! <新人シリーズ4> オーディエンス賞受賞者

8/15～16…ささらこうさら ※推薦人:原田広美(舞踊評論)

8/18～19…ピンク ※推薦人:松澤慶(舞踊批評)

8/21～KeM-kemunimaku-project ※die pratze dance festival ダンスがみたい! <新人シリーズ4> 新人賞受賞者

<麻布 die pratze>

7/11～12…若浪真太 ※推薦人:栗原た(舞踊批評)

8/1～2…矢作聰子+庄 隆志+野崎夏世

※推薦人:吉田悠樹彦(舞踊批評)

8/4～5…神雄二 DANCE MISSION

※推薦人:村岡秀弥(舞踊批評)

8/6～8…今津雅晴×今津武志 ※推薦人:稻田奈緒美(舞踊批評)

8/10～11…大岩淑子 ※推薦人:西田留美可(舞踊批評)

8/13～14…**KOGA DANCE** presents

※推薦人:前田允(舞踊批評)

8/16…神村恵×種子田耕 ※推薦人:石井連朗(舞踊評論家)

※詳細はディプラツ HP:<http://www.geocities.jp/azabubu/>

まで

原稿を募集しています

CUT INでは、演劇、ダンスなどの舞台芸術を中心に美術や音楽、映像などジャンルを問わず実験的な表現をとりあげた原稿を随时募集しています。

詳細は

kousukeogasawara@mail.goo.ne.jp (小笠原)

までご一報ください。